# モームに於ける「美」の観念

矢野道夫（外国語研究室）

Michio YANO :

## The Idea of Beauty in W. S. Maugham

私の仕事は今年81才の春を迎えて，今尚批評や紹介に健筆をふるいつつある英文壇の耆宿モームが，芸術家として美というものをどのように見て来たか，その跡を辿つてみることである。それは又，彼の人生観を解明することにもなるであろう。

The Summing Up（締めくゝり）という回想録の中でモームは「私に確信出来ることは一つしかない，それはこの世に確信出来ることは殆んどない，ということだ」と言つている。こうした作家に関して何等かの提言をなすことは，確に困難且危険であると思う。併しながら彼の書いたものを仔細に検討してみると，作家としてのモームの念頭を終生去らなかつたのは，彼がそれを好むにせよ好まないにせよ，「美」の観念であり，それが最後に一つの確信に近いものを生み出したと我々は断定せざるを得ない。勿論，彼は美の価値に対しても早くから疑問を抱き，後期には一介の物語作者たることに甘んじて来たかに見える。併し彼が最後に80才に垂んとして，人間がこの世の不可避的な悪に対して示す毅然たる行為の中に最高の美を認め，そこに絶望からの救いを見出すに至つたこと，即ち救いを「美」に求めざるを得なかつたことは，芸術家としての彼の宿命を物語るもので我々の興味をそそるのである。

私はこゝで「美」が彼の人生観に於てどのような位置を占めて来たかを時代を追うて検討し，次に彼が到達した「美」の内容を説明しようと思う。

1895年21才でまだ St. Thomas病院附属医学校3年に在学中，彼は才二回のイタリー旅行をした。その前年の才一回イタリー旅行でも当時流行のペイター，ラスキン，シモンヅ等の影響下にあり，彼はラスキンのほめるものは何でもほめ，くさすものは何でもくさしたと書いているが，直接世紀末の唯美主義の洗礼を受けたのは才二回のイタリー旅行中の Capri島に於てであつた。そこには詩人あり，作曲家あり，画家あり，彫刻家あり，戦争帰りの軍人あり，とりわけ彼がかつて留学したハイデルベルヒ以来の友人がいた。この友人は小説「人間の絆」では Hayward として出て来る芸術に耽溺した男であるが，この人達が日夜夜毎，芸術と美，文学とローマ史について論ずる有様に彼は恍惚としてきき入つたのである。「芸術の為の芸術」というのが彼等の合言葉であつた。併し乍ら，いつまでも唯美主義に耽溺してそこに止ることは彼の稟性の許さないところである。彼のメモを集めた A Writer's Notebook の1896年のところに，Capri島にてと肩書があつて「人生の意味は何だろう？目的は何だろう？道徳なんてものがあるだろうか？行動の規準があるだろうか？私には解らない，解らない，解らない」と絶望の叫びを上げている。即ち，彼にとつて美は行動の規準にはならないかに見える。それも理由のあることで，彼が当時学んでいた医学ははつきりと進化論を教え，自然陶汰の事実を示し "Might is right"（力は正義）を指さした筈である。そして彼の頭脳は極めて論理的であつて，他の諸々の価値を否定して然もひとり美の価値のみを温存することは，少く共理論的には不可能であつた筈である。それにも不拘，彼は The Summing Up の中でこの頃のことを次のように述懐している。

「私は長い間，美のみが人生に意味を与え，各時代の唯一の目的は時折芸術家を生み出すことにあると考えていた。芸術作品は人間活動の最高の生産物であつて，これあるが為にあらゆる悲惨や苦労や失敗が正当化される。一人のミケランジエロ，一人のシエイクスピア，一人のキーツを生み出す為に何百万何千万の人が苦しみ死んでいこうとも，生には意味がある，と私は考えた。後になつて私はこの無茶な考を修正して，芸術作品の中に beautiful life（美しき人生）を加えて，それのみが人生に意味を与えるとしたが，まだ美を重んじている点に於て変りはなかつた，云々」と云つている。

ではどうしてこんな矛盾が起つたか？　即ち一方では美の価値に疑問を抱き乍ら，他方では美を人生唯一の目的と考えることが可能であつたか？　けだし芸術をもつて人生の存在理由とするのは芸術家にとつては普通の考え方であるし，それに早くから作家として立たんとする強い決意をもつていたモームが自分の職業とする芸術に最高の位置を与えんとするのは必要に迫られた理論であつて，たとえ理性的には納得出来なくとも，漠然と感情的には支持せざるを得なかつた理論と想像される。

では以上のモームの言にあるように，自分の理論に修正を加えて，美を beautiful life の中に求めるに至つた才一回の変化は何時頃であろうか？　これは仲々決定困難な問題であるが，A Writer's Notebook の1901年のところに次の言葉がある。

「(ペイターのように) 美を人生の目的とするのは，いささか馬鹿げている。それは平穏時の教義であつて何か非常の際には殆んど役に立たない」と。

仍つて大体この頃，即ち27才頃で彼は唯美主義の影響を完全に脱出したと考え得ると思う。次の才二期は人間が織りなす人生模様の美しさに虚無からの救いを求めんとした時代で，この期の代表作でその総決算であるのはいうまでもなく，Of Human Bondage(人間の絆について) である。主人公 Philip Carey がパリーの巷で敗残の詩人クロンシヨウから一枚のペルシヤ絨氈を贈られ，散々苦しみをなめた揚句，やつとその謎をといてスピノザの所謂「人間の絆」を脱するというのが，一つのテーマになつている。自伝的な作品である同書には10才で両親を失い，牧師をしていた伯父に育てられた彼が伯父への反動もあつて，早くから信仰をすて虚無に陥つたことが述べられているが，それに続けて彼は次のように言う。

「……人生無意味の真理を教えた同じ想像の奔騰は同時にもう一つの思想をもたらした。そしてそれこそは彼クロンシヨウがあのペルシヤ絨氈をおくつてくれた理由であるように思えた。丁度織匠があの精巧な模様を織り出して行く時の目的が唯その審美感を満足させようという丈にあるとすれば，人間も又一生をそれと同じように生きていいわけだ。……なにもある行為をそうしなければならない必要もない代りに，したからといつて別に益もない。唯彼自身の喜びの為に何かしたというにすぎない。人間一生の様々な事件，彼の行為，彼の感情，彼の思想，そうしたものから或は整然とした意匠，或は精巧な複雑な意匠，或は美しい意匠を夫々織り出すことが出来る丈だ」と。(中野氏訳による)

即ち，この人生に意味を与えるものは稀にしか現われない所謂「芸術家」ではなくして，個々の人が夫々芸術家となつて夫々の人生絵模様を織りなして行く喜びの中にあるというのだ。これが有名な彼の「人生絵模様説」であつて，モームと云えば直ぐこの説をもち出して簡単に片付ける人がいる。この思想が40才にしてモームの到達した人生観を示すものであることに間違はないが，しかし彼はそこに止つたのではない。偶然なことから，或は当然なことかもしれないが，彼は別の境地に向つて足を踏み出すことになる。この事実を特に私は指摘し強調しておきたい。

さて「人間の絆」を完成して肩のしこりを下す暇もなく，才一次世界大戦が起つて彼はスイスでスパイ監督のような仕事に一年間従事するが，それを終えてアメリカに渡り，ついで1916年南太平洋の島々を訪れる。そしてこの旅行が彼に一大転機をもたらしたのである。旅行の目的は心の休息を求めることと，後年発表された「月と6ペンス」の取材の為であつたが，この旅行について The Summing Up で次の通り語つている。

「私は美とロマンスを求めて出掛けた。そして私を悩ました苦しみと私との間に太洋がはさまれるのが嬉しかつた。私は美とロマンスを見出したが，その外に全く思いがけないものを発見した。私は新しい自己を発見したのだ。セント・トマス医学校を去つて以来，私が一緒に暮して来たのは culture「文化」に重きをおく人達だつた。私はこの世で芸術以上に重要なものはないと考えるようになつていた。私は宇宙の意味を探したが，私が見付けたものは人間がそこここで作り出す美丈であつた。表面は多彩を極めた生活を送つていたが裏面は狭い生活だつた。所が今や私は全く新しい世界に入つたのだ。小説家としての私の本能は新奇なものを吸収するため活潑に動き出した。そこの住民達で文化をもつている者は殆んどなかつた。彼等は私とは違つた学校で人生勉強をし，違つた結論に到達していた。そして私の方が高等だとは考えられなかつた，云々」(53章)

こゝに「新しい自己を発見した」とあるのは，いうまでもなく「今まで私がつけていた文化というマスクをとり去つた赤裸々な人間を取戻した」ということである。1896年，即ちこの旅行より丸20年の昔，まだ医学生であつたモームは「私が捕えられているが，併し私が破棄することの出来る様々な迷妄や誤解が存在する限り人生は楽しい。幼い頃から注ぎこまれた偏見を次々と破壊していくこと自体が一つの仕事であり，楽しみである」と云つているが，この旺盛な作家的探求心が再び烈しく活動を始めたのである。今まで自分の暮して来た世界は広いようで狭かつた。そこには文化人というものが居て，行

動の規則を作りそれに従わせようとしている。都会人達は袋に入れられた石の集りのようなものだ，次才々々に持つて生れた角をすりへらして行く。ところが，ここには原始そのままを保存している人間がいる，その特異性を思うがままに発達させ，まだ角を失わない人間，より人間性に近い人間がいる——といつた考えが一度にどつと彼におし寄せて来て，彼は殆んど動物学者的な興味をもつてそこの新奇な人間を観察し，ノートを一杯にして帰つたのである。一体作家としてのモームを特徴づけているものは，そのあくことを知らぬ人間への関心である。人間が如何に突飛な行動をするか，然も一見突飛に見えるその行動も如何に内面的な必然性をもつたものであるかを執拗に探求しつづけたのがモームの文学であると云える。そして美人の善は当然であつて，むしろ善人の中に悪を指摘し，反つて悪人の中に善を認めんとするのが彼の態度であり，このように cynical と非難された観察態度をとるに至つた原因の一つはこの旅行にあると思われる。この旅行で彼が収穫したものは文化の衣を脱ぎすてて，元の角をとり戻した自己であるが，その文化の衣と共に，その文化の生み出した所謂「美」も一緒に太平洋の中に棄てて来た観がある。こゝに彼の才二期は終つて才三期に入るのである。私が今まで述べたことを要約してみると，唯美主義の影響を受けて芸術の美に最高の位置を与えたのが才一期，それに疑問をいだいて人生の美しさというものを考え，人夫々が自らの美観に応じて人生模様を織り出す喜びの中に人生の目的を見出さんとしたのが才二期，そしてこの旅行以後の才三期に於ては価値としての美は考えられなくなり，「善」の問題が浮び上つて来るのである。ではどうして彼が今まで20年の長きにわたつて尊重して来た美を棄てるに至つたか，それを解明する為には，様々な経験や吟味を経た後彼が到達した「美」の観念について説明しなければならない。

彼が美に直接言及している作品は少く共四つある。小説 "Cakes and Ale" (1930)，エッセイ "Don Fernando" (1935)，回想録"The Summing Up" (1938)，感想録 "A Writer's Notebook" (1949) がそれである。それ等をよみ合せてみると次のように要約される。

一体芸術のもつ美的情緒は人に快感を与えるもので，一つの pleasure (快楽) である。その点に於て肉体的な快楽，例えば労仂者が疲れた後で飲む一杯のジン酒の如きものである。だから「芸術の為の芸術」というのは「ジンの為のジン」ということに等しい。道学者は精神的快楽の方が肉体的快楽よりもつと強くもつと永続的だというが，それは無効である。単に pleasure として見た時，両者の間に優劣をつけることは何人も出来ない筈だ。その証拠に精神的快楽も肉体的快楽と同様，永く続けられるものではないからだ。快楽というものは少し宛間隔をおいて経験されることが必要であつて，例えばベートオベンの才五交響楽を毎日きくことが退屈であるのは，丁度ちようざめのはらごといつた珍味を毎日食べたらあきて仕舞うのと同断である。この様に美というものは長い熟視熟考に堪えられないものであつて，山の頂上のようなものである。我々はそこに上つたら降りて行くより仕方がない。又ばらの香のようなものである。はつとその美香に打たれる丈でおしまいである。美は完成されたものであるから我々は手のつけようがない。そこで人々は美に他の属性をつけ加えるようになつた。曰く崇高，曰く人間的興味，曰くやさしさ，曰く愛，等々。併しそれ等は本来美とは何の関係もないものである。我々がラシーヌの完成さよりもシエイクスピアの不完全さにより興味を感ずるのは，そこに複雑な要素が入りまじつていて我々の想像力を仂かす余地があるからである。

次に彼は美が如何に価値として認め難いかの証明として美の相対性を持つて来る。彼の「クリスマス休暇」という小説はこの美の相対性を一つのテーマにしている。その外「美」が時代々々の要求に従つて変遷して行く例を彼は色々あげているが，最も卑近な例として美人型をあげ，1941年にこうかいている。

「私の若い頃の英国の美人型は胸がゆつたりとして，腰が小さく，お尻の大きい女であつて，多産型のものだつた。ところが現代の理想型はほつそりして，お尻がやせて，胸が小さく，脚の長い女である。恐らく経済状態が大家族を許さないので，こんな不姙型がもてはやされ，又男性に近い型が喜ばれるのもこの理由によるのではなかろうか？」というのだ。世の芸術論者達は絶対不変の美を持つ作品を創り出した芸術家の例として，シエイクスピア，ベートオベン，セザンヌをあげるけれど，初めの二者は比較的安全として，最後のセザンヌは危いものだ。セザンヌが我々の孫達の上に我々が現在感ずる感銘を与えるかどうかは疑問である。(尚，前二者は人間性とより深い関係を持つことをこの際注意してよい。——筆者) 従つて美はある特定の時にある特定の情緒をひき起すものであつて，「不変の美」などというものはあり得ない。keats は長詩 Endymion の才一行で嘘をついた。美は決して "a joy for ever" ではない，と極言している。

ではこのような美を盛られた筈の芸術作品というものには価値があるのか，ないのか？　又ありとすれば，そ

の作品のどこにあるのか？モームは次のように考える。

「芸術作品はその芸術家が意図すると否とを問わず，一つの commuication（伝達）をするものだ。この communication が美であるならば，それは偶然であつて作者は始めから美を創り出そうとして創作するのではない。創作家は自己の為に解放を求めて創作するのだ。丁度蜜蜂が蜜を集めるのは自分のためにするのであつて，人間がそれを色々と利用するのはあずかり知らないのと同様である。この communication には二通りある。一つはその作品がこの苛酷な人生からの休息，この世に不可避的な悪からの慰めを与える場合である。これはこれでいゝと思う。但し世の中には芸術愛好家というものがあつて，芸術の鑑賞に一生を費している人がいる。彼等は読書の楽しみの為本をよみ，毎日を画廊に行つてつまらぬ瞑想に過したりする。彼等は芸術が与えるpleasure に耽溺してしまつて，より根本的な人間活動から逃避しているのだ。一種の阿片常用者である。否それ以下である。何故なら阿片常用者には自己満足はないが，彼等には沢山の本をよみ沢山の絵を見たが為に，一般人に優れたりとする優越感があるからだ。芸術はこうした人生からの逃避でなくて，苦しい人生の慰安となる時，それ丈でも存在理由はあるのだ。併し偉大な芸術はもう一つの communication を持つている。それはもつと積極的な面，即ち人の魂を高め，より高貴な，より收穫の多い活動へと人を促す作用である。人にright action（正しい行為）を可能ならしめる仂きである。一言にして云えば，芸術の価値は「美」にあるのではなく，それが人間の character（品性）に及ぼす影響にあるのだ」。即ち，芸術作品は必然的に美を通じて communication をせざるを得ないが（勿論モームのいうように美は偶然の産物かもしれぬが，結果的には美がなければ芸術作品と云えぬ），その美が right action への suggestion を含まねばならぬ，と云うのである。モームも又，芸術は人生の為にある，という英国伝統の平凡な説に帰つて来たのである。

このようにして，モームに於ては「美」は独立した本質的価値なしとして却けられ，美の問題は「善」の問題に移るのである。そして彼に依れば善とはright action によつて示される。逆に言えば善の外部に現れたものが right action である。それでは初期に於ては他の諸々の価値と共に，勿論この善の絶対的価値を否定していたモームが，何故後年になつて「善」に丈絶対的な，そして本質的な価値を肯定するに至つたか？　けだしモームが前後七回，殆んど全世界にわたる大旅行の見聞と長年の思索の結果，絶対不変に近いと考えるに至つたのは神でもなく，芸術でもなく，実に文化のマスクを脱ぎすてた人間性そのものであつたと考えられる。彼に Then and Now（昔も今も）という小説があるが，そこで彼は人間を時と処を越えて不変なものとして把握し，そこに限りない興味を感じているかに見える。彼に於て right action が絶対的価値を持つ根拠も正にこゝにあると思う。何故なら彼は right action に依つて示される善は人間の本能に根ざしたものであつて，美と異り人をあきさせることもなく，時間がそれを弱めることもない，茫々乎として夢の如き自分の一生に於て，私の出逢つたことのある人間の善丈が私に reality を与えてくれる，といつているからだ。この点に於て彼は決してpessimist でもなく，cynic でもない。

それでは彼はこの right action に依つて具体的にどんな行為を考えていたか？彼はその内容を明示していないが，A Writer's Notebook の一番最後のところ，1949年の項に大要次の如き結論を述べているので，これに依つて彼の考えている right action の内容と，それが彼に於て最高の位置を占める美であることを推察出来る。

「私は人間がこの世の不合理に立向つて行く英雄的な勇気の中に芸術が与える美以上の美があると思う。このような美は，死に突入しながら自分の中隊に伝令を伝えた Paddy Finucane の不屈の行動の中にあり，又僚友の負担とならんことを恐れて北極の夜，従容として死についた Captain Oates の冷静なる決断の中に，又若くも美しくも賢くもない Helen Vaglianoが地獄の苦しみをなめ乍ら，友を裏切るより喜んで死を迎えたその誠実さの中に，この芸術以上の美がある。パスカルは人間の高貴性は人間が「思考する」ところにある，と云つたが，そうではない。人間の高貴性はもつと根本的なもので，文化や教養から生れるものでなく，人間の最も原始的な本能に根ざし，若し神があるとすればその神でさえも恥しく顔をそらす程のものである。我々は人間が様々な弱点や罪悪を持ち乍ら，然もこうした不滅の光芒を放つ行為をすることが出来ることを知つて，やつと絶望からの救いを得ることが出来るのだ」と。

かくして彼にあつては，最高の美は芸術に依つて生み出されるのではなく，赤裸々な人間の本性に依つて生み出される right action 即ち「美」にあるわけで，一種の善美合一説である。芸術は唯，その善を促進する仂きしかしないことになる。然もその善に対して「美」という言葉を使わざるを得なかつたモームに，私は芸術家としての彼の最後の堡塁を見るような気がする。

併し乍ら彼にとつて最高の，そして最後の美すらも，

彼の人生観全体から考える時は，人生の理由でもなく，説明でもなく，唯人間が生存していることの extenuation（申訳）に過ぎない，とThe Summing Upの終章で彼は嘆じている。青年時代に彼をおそつた「人生不可知論」から，彼は永久に回復出来ないかに見える。

（この一文は日本英文学会才6回中国四国大会にて発表した原稿を書き直したものである。）